# APORSの10年間を振り返って

髙森　寛，柳井　浩

## 1．前　史

アジア太平洋地域のOR学会をつくってはどうかという話が，チラホラ出始めたのは，1970年代の後半のことであった．本学会の国際委員会あたりでも，その可能性をめぐって模索がつづけられていた．当時の委員長横井満氏も何通かの書簡を関係各国に送っておられた．しかし，日本側の態度が具体性を欠いていたせいか，話はなかなか進まなかった．

これがAPORS結成に向かって急速な進展を見せ始めたのは1983年に伊理正夫東大教授がIFORS副会長になられたころのことであった．IFORS会長のMüller-Melbach教授からの勧めもあり，当時のOR学会会長近藤次郎教授のもとにアジア各国とも連絡，話は急速に展開した．

## 2．筑波での会議

このようにして，1985年3月21日，アジア各国のオペレーションズ・リサーチ学会の代表を筑波市に招聘し，連合体発会の相談をすることになった．このとき集まったのは，

| | |
|---|---|
| 中　　国 | Dr. HSU Guang-Hui |
| 韓　　国 | Dr. PAK Chae Ha, Dr. KANG Suk-Ho |
| シンガポール | Dr. CHEW Kim Lin |
| オーストラリア | Dr. Robert E. JOHNSTON |
| 日　　本 | 近藤次郎(日本OR学会長)，伊理正夫（IFORS副会長） |

国際委員会：髙森寛，若山邦紘，伏見正則，柳井浩，浦谷規，高橋誠，吉田敏弘

の面々であった．会議は近藤会長が当時所長を務めておられた筑波市の国立公害研究所の会議室を借りて，髙森国際委員を仮議長として始められた．近藤会長の挨拶の後，伊理氏はMüller-Melbach会長の意向，EUROやラテン・アメリカの活動状況を説明，また，アジア太平洋連合体の必要性を説かれた．

それまでの経過では，アジア太平洋地域での連合組織の発足にもっとも熱心で積極的であったのは韓国の学会で，この会議でも，PAK Chae Ha，KANG Suk-Hoの両氏が，定期的な国際会議の開催や連合体独自の会誌の発行を提案するほどであった．これに対して，日本側としては，各国，お互いに，あまり負担にならないように，まずは，ゆるやかなAssociationというかたちで始めてみようという意見であった．会議は，大方，そういうところに落ち着き，次のようなことが決定された．

1．APORS＝Asian Pacific Operational Research Societies within IFORS を発足させること．
2．発足当初の構成OR学会は下記の通り．
　オーストラリアOR学会，ASOR
　中国OR学会，ORSC
　香港OR学会，ORSHK
　インドOR学会，ORSI
　ニュージーランドOR学会，ORSNZ
　韓国OR学会，KORS
　日本OR学会，ORSJ
　シンガポールOR学会，ORSS
3．初代会長は韓国OR学会の会員のどなたかにお願いすること．
　この点に関しては，会議の席上では，韓国から出席のChae Ha Pak氏にお願いしようという意向が強かったが，同氏は「APORS会長は，構成する各国学会のうちの会長のだれかがこれにあたるのが望ましい」という立場から固辞され，後日，韓国OR学会長Woong Bae Rha氏が会長に就任されることになった．
4．会計財務担当（Treasurer）には，オーストラリ

たかもり　ひろし
青山学院大学国際政治経済学部
〒150 渋谷区渋谷4-4-25
やない　ひろし
慶応義塾大学理工学部管理工学科
〒223 横浜市港区日吉3-14-1


© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

アのJohnston博士がこれにあたられることになった.

5．事務局(Secretary)には，日本OR学会の若山邦紘氏が任命された.

6．APORS国際会議について

韓国代表Pak氏は，第1回APORS会議をソウル市で，1988年に開催したい意向を表明した.

当初，初対面のこともあり，多少ぎこちなかった各国代表も，会合を重ね，折りしも開催準備中の科学万博を見学したり，会食をしているうちに，次第にうち解け，腹蔵なく話し合えるようになってきた.

ところで，このように各国から人を招聘して，会議を開くには，財政的負担が問題となる．今もそうだが，当時のOR学会の財政状態も決して豊かではなかった．その当時まだ存在していなかった組織を発足させる費用は，予算上もなかなか捻出が困難である．これが可能となったのは，実際のところ，故横山勝義会長のご寄付の賜物である．ここに銘記したい.

## 3．第1回APORS'88ソウル

こうしてAPORSが発足したわけだが，前述のごとく，発議者の我々日本側としては，当面の活動をNewsletterや個人的な交流のバックアップ程度からぼちぼち始めるつもりであった．実際，若山氏は高橋誠氏の協力を得て，Newsletterを頻繁に発行，情報の交換と人の交流に大きな力を尽くされた．このNewsletterは，現在も，韓国のPARK Sung Joo教授によってつづけられている.

一方，韓国は，これより1歩を進めて，APORS独自の大会を開催することを計画していた．当時，アジアの経済力や，また，そのアンバランスからして，わが国では危惧の念を持つ向きもないわけではなかったが，もちろん，“やろう”という韓国の動きに反対する理由はない．こうして，第1回APORS大会のソウル開催が決定されたのである.

韓国OR学会は，RHA氏の下で，大車輪の準備を始められた．1988年にPAK氏が渡米の途中わざわざ東京に寄られ，日本から少しでも，多くの人々が参加するようにと協力を求められた折りにも，日本からはせいぜい25名の参加者を見込んだ程度であったが，日本OR学会の努力もあって，実際に蓋を開けてみると日本から40数名の参加者があり，我々としても，安堵の胸を撫でおろした次第である．しかし，これも韓国の熱意を反映したものといえよう.

第1回APORS大会は，“The New Challenge for OR／MS in the Asian-Pacific Region”のテーマのもとに，ソウル市のSheraton Walker Hillホテルで，1988月8月24日～26日の3日間にわたって，盛大に，また，華やかに，開催された．APORS会長Rha氏は，当時韓国政府官僚（副首相）の要職にあり，開会式でのご挨拶も格調高いものであった．大会の模様は，韓国の新聞にも，Rha会長の写真とともに大きく報道され，ORの紹介，産業の発展のためにORに期待される役割と可能性なども紹介されていた．この大会をテコにして，韓国では，ORの社会的な認知は高まり，学会の会員数も増え，OR学会も新しい事務所を購入するまでに至ったと聞いている．丁度，2～3週間の後には，ソウル市でのオリンピック大会をひかえて，ソウル市内，郊外での競技場や，いくつかのモダンな建物の建築作業も最終段階にあり，韓国経済の活況ぶり，市民の意気高揚は，われわれにも肌に感じられた.

大会開催中に，第2回APORS理事会が開かれ，各国代表は，3年前の筑波市での初対面のAPORS結成会議以来の再会を喜び，また，ついに第1回国際大会を開くことができたことを共に喜んだ．理事会は，RHA会長の司会のもと，次期開催地，次期会長，その他の役員のことなどが主な議題であった．次期は日本でという要望が，RHA議長をはじめとして，強く出された．日本OR学会としては，1）物価が高い日本での開催では，参加者数に心配があること，2）いろいろな国の学会の対等な役割分担が望ましいことなどを理由に，少なくとも，次期は日本以外が望ましいという意見を出した.

シンガーポールと，香港は引き受けてもらえないかという話になったが，まだ，双方とも，学会が小さいこともあり，国際大会を開催できるような人的，資金的資源に自信がないということで，躊躇した．特に，ソウルでの眼を見張らせるばかりの盛大な第1回大会の開催最中でもあり，われわれ日本代表団も，いつの日か，日本で開催するにしても，こんなに立派なものはとても無理だと思ったぐらいである．他の国の代表の気後れも無理のないことであった．こうして第1日目は，決定をみないまま，理事会は翌日に持ち越された.

2日目の理事会になって，中国の代表のHSU氏が，第2回は中国での開催を引き受けてもよいと申し出た．これは誰も予期していなかったことである．当時，東西は，政治的に冷たい疎遠な関係にあり，交流が困難


© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

な中国に対し，われわれには，いささか遠慮する面があった．韓国と中国の間には国交がなく飛行機も飛んでいない状況で，この中国の申し出をどう受け止めるかは，韓国の出かたにかかっていた．しかし，これもわれわれの危惧を吹き飛ばすかのように，当初日本での開催を要望していた韓国が，Kang教授をはじめとして，「よし，その話に乗ろう」言いだしたのである．政治的配慮をさておいて，アカデミズムを，即座に，優先させた韓国のORの同僚に，敬意の念を抱いたのは，日本代表団だけではなかったであろう．

こうして，第2回の場所は北京で，時期は1991年ということに決まった．3年に一度というIFORSの大会と周期を同じくし，1年位相をずらしての開催である．第2期APORS会長はHSU博士に決まった．また，日本からは，若山氏がSecretaryとして引き続き事務局を担当してくれることになった．

また，IFORSの副会長をアジア太平洋地域から，常に1人推薦するようIFORSから要請があり，APORSとしては，APORS会長の任期を終えた人を推薦するのを慣例としようというこになり，RHA氏がIFORSの副会長に推薦されることになった．

## 4．大阪における理事会

さて，こうして順調に発展をみせたAPORSであるが，ときとしていくつかの問題が起こった．これらが集中して起こったのは，1989年7月に大阪で開かれたAPORS理事会であった．

この理事会は，丁度このとき大阪で開かれたTIMSの国際会議に時を合わせて開催されたのであるが，これに先立つ1～2ヶ月の中国は，天安門事件の勃発とその前後の大混乱のさなかにあった．いわゆる西欧型文明国のなかには，これを「人道的」見地から非難して止まぬ人々が少なくなかった．オーストラリアOR学会などの若い層にはこのような人々が多く，北京大会そのものに対するボイコットの動きすらあったと聞く．(実際，北京の大会には，オーストラリアの公式代表は出席しなかった)

しかし，我々日本OR学会国際委員が心配したのは，それよりも，当時の中国における政治的大混乱のさなか，北京での開催がそもそも可能なのか，HSU会長は理事会へやってこれるのかという点であった．それが分からなければあれこれ議論をしてみたところで仕方がない．国際委員会では，急遽，臨時の会議を開き，PDPCチャートを作成し，対策を協議した．

ところが実際の会議のときになってみると，音信もとぎれがちであったHSU会長が，ひょっこり現われて，北京大会の会場，見学先など周到な計画が着々進められていることを報告された．

我々の心配は杞憂に過ぎず，中国がAPORS開催にむしろ力を入れていることが分かった．

また，この理事会でマレーシア代表が初めてオブザーバーとして参加した．

このころのもう1つの難しい問題は，APORS Journalの件であった．APORSは，すでに述べたように，シンガポール発行のORの論文誌をAPORSの正式の機関誌としてきたが，これはまた，正式の機関誌を持たないニュージーランドのOR学会の機関誌としても機能してきた．

そこで，編集の中心になって精力的な努力を続けてこられたのが，シンガポールのCHEW Kim Lin氏とニュージーランドOR学会であった．しかしながら，購読者数の伸び悩み，人手や資金的な困難など，同教授のご心労は大変なものであったとお察しする．

丁度，そのころ，欧州のある大手出版社からの申し出があった．編集長はAPORS各国の人々を回り持ちとし，これにかなり多額の報酬を提供し，発行販売を引き受けようというものである．

ニュージーランドOR学会は，これに反対した．雑誌が商業出版者の手にわたれば，販路拡大のため，アメリカ流アカデミズムの悪しき影響を受けるのは必至である．発展するアジア太平洋地域のものであるこの雑誌の本質を失うことになるという理由である．

日本OR学会もこの意見を強く支持した．「多額の報酬」はいくつかの国の人々には魅力であったとも思われるが，日本側は，あるいは資本主義の本質を説き，あるいは過去の事例をあげ，結局のところ，この雑誌がわれわれの手から離れていくことの危険に対する注意を喚起した．さらに，購読者数の増加の積極的努力と，日本からとりあえず年間1,500シンガポール・ドルの醵金をすることを約して，これまで通りChew教授のご尽力をお願いすることに成功した．こうして，APORS Journalの発行は今日も従来通り続行されているが，これが同教授の並々ならぬ努力のたまものであることを銘記しなければならない．

## 5．ギリシャ・アテネでの理事会

1990年ギリシャのアテネでIFORS大会が開催された．日本からは，もちろん，アジア太平洋地域からの


© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

参加者も少なくなかった．例によって，この折りにも，APORS理事会が開かれた．新顔として，フィリピンのE. A. del ROSARIO女史が同国のOR学会の代表として，オブザーバーの資格で出席した．この会議を経て，フィリピンのOR学会のAPORS加盟が決まった．

理事会の中心的議題は，しかし，次期APORSの大会の開催地の問題である．日本としては，それまでの2回が北半球で行なわれたのであるから，バランス上も，南半球，すなわち，オーストラリアあるいはニュージーランドでの開催を希望した．しかし両国とも，まだ，そこまでの考えはまとまっていなかったようであった．

それに対し，出席の諸国には日本での開催を希望する向きが多かった．日本としては，日本での物価の高さからアジア諸国からの出席者が少なくなることを懸念しており，むしろ別の面から貢献したいという考えを基本にしていた．それにもかかわらず，各国の希望は日本に集まっており，どうしてもといわれれば逃げるつもりもないので，とりあえず帰国後の検討を約して会議を終わった．

代表が帰国してからも，日本OR学会内での議論が続いた．焦点はやはり，日本の物価高である．諸外国からの参加者に対し，できるだけのサービスをしたいのは山々であるが，日本社会のシステムからして，個人に対する援助金という形の支出は，ほとんど例外的である．日本の経済力という面から，このような期待をされても対応できない．日本OR学会は，所詮，私立の任意団体に過ぎない．

また，ビザの問題もある．外国人労働者問題は日に日に深刻化している．日本外務省が，この点に関して，神経質になるのは当然だが，アジア諸国からの入国に際しては，日本OR学会の会長が個人的に責任を負わなければビザがおりない．…それやこれやの問題があるにせよ，結局いつかは引き受けなければならないという考えから，第3回APORS大会の日本での開催を引き受けざるを得ない可能性を踏まえて，1991年のAPORS理事会にのぞむということに，学会内の意見はまとまった．

## 6．第2回APORS'91北京

第2回のAPORS大会は，“OR：Making Decisions for Winning Victory”のテーマのもとに，北京郊外の中苑賓館において，8月27日～30日の4日間にわたって開催された．

このときの理事会では，やはり次期の開催地を決めるのが中心的議題であったが，日本OR学会としては，第3回大会は，オーストラリアでという意見でのぞんだ．しかし，オーストラリアの代表は，この北京大会は欠席し，その案はお話しにならず，結局，第3回の日本での開催に関しては，帰国後，日本OR学会の理事会にはかることを約するところとなった．

また，もうひとつの決定事項は，第3回大会を日本でとなると，APORSの第3期の会長は日本OR学会からということになるので，その場合には，Secretaryは韓国学会から出すということが決まった．後日，PARK Sung-Joo教授がSecretaryの任にあたることになったという連絡が入った．若山氏のこれまでの献身的努力と，明るく，わけへだてをしない社交的な人柄がAPORSの発展に大きな力となったことは言うをまたない．特記して，賞賛されるべきであろう．

## 7．第3回APORS'94福岡

さて，日本OR学会の理事会の雰囲気も，どうせいつかはやらなければならないのなら，これ以上逃げ回らずに引き受けた方がよいということになった．ここに，1994年7月九州福岡における第3回APORS大会の開催が決定された．

こうして，日本OR学会会長伊理正夫教授がAPORS会長に就任，そのもとに準備が始められた．かってAPORSの発足のために奔走され，ご苦労された伊理教授の会長就任は，各国のOR学会からも喜ばれた．

周知のように，第3回大会は，“Development in Diversity and Harmony”をテーマとして，福岡リーセントホテルで，7月26～29日の4日間にわたり開催された．総参加者数は336名で，海外からの参加者数は，90名であった．また，このときのAPORS理事会では，第4回APORS'97はオーストラリアで開催されることが決まった．


© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．